

ゆりかごから墓場まで9

対話でつながる地域づくり 「広報」をととして



▲左から中村、東

麦の芽福祉会専務理事 中村隆司

指宿地域本部常務理事

東 麻梨江

指宿・みんなの家では、毎年バレンタインデーに物品販売や募金・署名活動などお世話になった地域のみなさん一人ひとりに、なかまによる手作り品とチョコに手紙を添えて手渡しに行きます。「いつもありがとう！ プレゼントです」と渡す喜び、相手の喜ぶ顔が見られる楽しみ。なかまの思いが伝わり、対話が生まれます。この対話の積み重ねが、あつたかい平和な地域づくりにつながっていくように思います。

■麦の芽の活動の 「もろもろ」6体

社会保障・社会福祉のあり方が変質し、経営主義や企業的思考にからめとられかねない状況がすす

むなか、麦の芽は、本来の福祉を守るためになにを大切にしてきたか、いまなにを大切にすべきか、あるいは、なにが弱体化しているのかなどを見据える際のいわば「ものさし」として、「6体」という仕組みをもっています。「6体」は組織体であることの重要な要素ともいえるものです。

「6体」とは次のとおりです。
①「教育体」…学びのあり方が、社会福祉、事業・実践、組織体のあり方を深める、②「協同体」…「二人の不安をねがいへそしてみんなのねがい」とする市民運動、事業体として、③「運動体」…障害者運動・福祉運動は、お金につながる「利害運動」ではなく、やさしさ、しあわせ、人間

らしさにつながる「承認運動」として、④「事業体」…福祉であり、非営利であり続ける限り「運動の事業・実践化」を探索、⑤「広報体」…住民・市民との出会い・交流の接点である文化的事業・活動をととしてつながり、「生き方の発信」をととして住民・市民を文化・人権・平和志向でつなぐ、⑥「経済体」…福祉とは「営利目的の成長経済」ではなく、「非営利のいのち」を守る・ひとりを守る社会目的経済」であり、お金のつくり方・使い方、組織のありよう、福祉や国のありようが決まる。

以下では、「6体」のなかの一つ「広報体」に焦点をあてます。

■なぜ「広報体」を とりあげるのか

広報 (public relations) とは、行政、企業、団体などが自らの考え方や活動、商品などの情報発信を行うことです。が、広報というと、PR＝広告・宣伝というイメージが強いのではないのでしょうか？「〇〇のサービスがあります」「△△よりお安いです」など、儲けるための広告・宣伝が福祉の世界でも見られるようになってきました。

ところで、社会を「政治・文化・コミュニティ・経済」の4つのカテゴリーに分けるとすれば、福祉は「文化・コミュニティ」のカテゴリーに入ります。ところが、今日では福祉が「営利目的の経済」へと転換され、事業だけで



▶地域の支援者さんにプレゼントする手づくり品

■指宿地域における「広報」すなわち地域づくり

指宿市は人口約4万人、薩摩半島の南端に位置し、砂蒸し温泉で有名な地域です。1995年作業所づくりから始まり、20余年経過した現在、指宿地域本部には「指宿ゆめのまち」内に「ワークショップみんなの家」(なかま27人)と「ゆめいろホーム」(なかま10人)の2施設があります。小さな事業所ですが、毎日の散歩、物品販売、署名募金活動、フェスタ・コンサート、ダイアリー普及など、「広報」は日常にあふれています。

なく、利用者、職員までも「商品化」したうえで、「利権獲得をめぐる取引」に、したがって「売買契約の金銭のつながり」に変容し続けています。仕上げは「教育を統制道具」にして徹底管理するというものです。まさに、「6体」とは真逆の逆行した様相です。これらの強化装置となっているのが、国あるいはマスメディアによる、「営利目的」は「あたりまえ」といった空気を送り込んでくる「広報操作」ではないか、という認識をもっています。

おした学習・交流活動のなかで、地域住民・市民と共有することだと考えてきました。無認可時代から、なかまたちが廃品回収などをとおして、地域や行政に当事者の声を届け、出合いの機会を重ねてきました。当初、地域に足を踏み入れた私たちは、地域から「文句」を言われ「わかってもらえない」と悩み、葛藤しました。しかし実は「私たちこそ地域のことがわかっていなかったのだ」と気づかせてもらい、私たち自身が変わっていききました。そうしたなかで、地域が、行政が、少しずつ変わっていきます。なかまの存在そのものが地域を変える「広報」であるとの実感をもりました。「文句」をもらった地域の方とは今でもつながりが途絶えていません。

II. 音楽などの文化活動や物品販売・署名・募金活動をととして、マスコミや行政、あるいは地域との学習・応答関係、対話の機会が生まれ、理解・共感が生み出されていきました。理解・共感の波紋は、利害関係ではなく、生身の応答関係・対話から広がっていくのです。「広報」とは対話であるといえます。

III. 個人の生き方や集団・体制のあり方など「生き方・あり方」を日常の実践をととして発信・提

■現在に至るまでの 「広報体」のあゆみ

「広報体」はどのように始まり、なにを築き、なにを続けてきたのかを振り返ってみると、I→Vの道筋を取り出すことができます。

まず、I. そもそも社会福祉施設の使命は、障害者問題・福祉問題を、当事者からの声の発信やバザールや署名などによる出会いをと

こうしてみると、「広報」とは地域づくりそのものだということができます。



▶ワークショップみんなの家の玄関前、お出かけするなかまたち